

夢形成のメカニズム

——『夢判断』を読む——

田 村 公 江

目 次

序 章

第1章 心的装置

第2章 夢思想の形成

第3章 夢内容への変造

第4章 願望充足の仕方——退行

第5章 願 望 と は

終 章

テキスト及び参考文献

テキストとしては、S. Fischer Verlag の、S. Freud Gesammelte Werke II-III 巻収載 “Die Traumdeutung” を使用。引用ページは (G. W. 30) などと表示する。翻訳としては、主に人文書院、フロイト著作集 2, 『夢判断』を参考とした。また直接引用することはなかったが、『精神分析用語辞典』ラブランシュ、ポンタリス共著を参考とした。

序 章

フロイトは周知のように「精神分析」の創始者であり、「無意識」を発見した人である。フロイト以降、精神分析学は無意識を探る技術を深め、人間の本質に迫る努力を続けて来た。ヒステリーや神経症といった個々の精神疾患を扱う狭い領域から、人間存在を考察する学問へと発展したのである。今日の精神分析学は、このように非常に豊かな状況を迎えているが、しかしまた「精神分析とはいったい何なのか」、「何を為しうるのか」というような根本的反省がなされる時期に来ているとも思われる。今こそフロイトに帰るべきであろう。精

神分析は人間の「無意識」を分析して明るみに出すとふつう考えられているのだが、もう少し突きつめて言えば、精神分析の分析対象は無意識的欲望なのだと思う。と言うと欲望とは何かということが、たちまち問題となってくるが、まさしく欲望こそが最も重要なテーマなのだと私は言いたい。というわけで、本論文では、フロイトのテキストを通じて、フロイトが欲望をどのようなものとして考えていたのかを考察する。そのような目的のためには『性欲論三篇』、『本能とその運命』なども重要な著作であるが、欲望とその充足を語っている点で、『夢判断』がとりわけ興味深いと思われた。以下、原則として『夢判断』のテキストに焦点を合わせて考察を進めるが、心的装置理論などを要約する際には、むしろ他の著作も適宜参照する。

さて、以上で本論文の目的と扱う内容がだいたい示されたと思う。そろそろ本文に入るつもりだが、その前に『夢判断』の基本テーゼを取り出して、その基本テーゼ解明をめざす本論文の構成を述べておこう。

まず、《夢において、夢内容 Trauminhalt と夢思想 Traumgedanken を区別すべきであり、夢の分析は、与えられた材料である夢内容から、その背後に隠されている夢思想を、謎解きのように解明していくことを目的とする》ということが前提されている。夢内容とは夢を見た人が語る内容であることから顕在内容 manifester Inhalt とも言われ、夢思想とは語られた内容の裏に隠された内容という意味で潜在内容 latenter Inhalt とも言われる。両者は同じ内容でも表現形式が異なっている。あるいは夢思想をオリジナル、夢内容をその翻訳とも言えるのである。夢分析はこの翻訳の逆を行く作業にほかならない。

そしてこうしたことを前提として、《夢は願望充足 Wunscherfüllung である》というテーゼにフロイトの考えは集約される。結局これを言いたいがために『夢判断』を書いたのだと言っても過言ではない。

この前提と基本テーゼから次のことが問題とされる。

- ・夢思想はどのようにして形成されるのか。
- ・夢思想から夢内容への翻訳（変造と言われる）はどのようにして行なわれるのか。
- ・願望充足とはどのような仕方での充足なのか。

・そもそも願望とはどのようなものか。

これらの問題を考えるにあたって、まずフロイトの心的装置理論を簡単に示しておこう。それを手掛りに順次考察を進めるつもりである。

第1章 心的装置

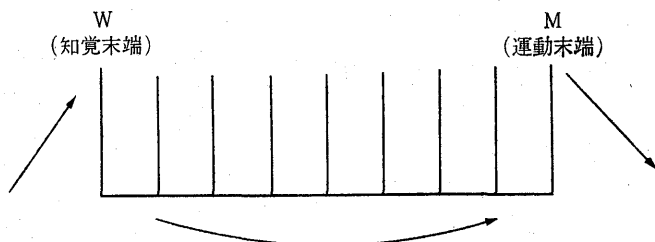
フロイトの心的装置理論は、1920年を境に大きく転回した。すなわち前期の第1局所論「無意識、前意識、意識」から後期の第2局所論「エス、自我、超自我」へと移行したのである。1900年に書かれた『夢判断』は前期著作群に属しているので、第1局所論をはじめに頭に入れておくのと非常に読みやすい。しかし理論というものは、整然とした形で一気にできあがるのではなく、変化しながら徐々に完成されていくものである。実際フロイトは、『夢判断』を書きながら、第1局所論を作りつつあったのである。従って今ここで、第1局所論の理論体系を完全に示そうとすれば、かえって『夢判断』執筆時のフロイトの考えからずれるということにもなりかねない。そこで基本的な事柄を押さえた上で、『夢判断』の記述に沿ってまとめておこうと思う。第1局所論の問題点や、詳しく説明すべき重要事項などについては後に譲ることにする。

そこでまず基本的な事柄であるが、いわゆる第1局所論は、心的装置を無意識系 das Unbewusste (Ubw), 前意識系 das Vorbewusste (Vbw), 意識系 das Bewußtsein (Bw) から構成されたものと考えている。この理論のキーワードは「抑圧」Verdrängung であると言ってよかろう。Ubw が Bw-Vbw とははっきり区別されるのは、Ubw に属する要素が、抑圧を受けて Bw-Vbw への侵入を拒まれているからである。

では『夢判断』において、第1局所論はどのように述べられているか。テキストの記述に沿って見てみよう。

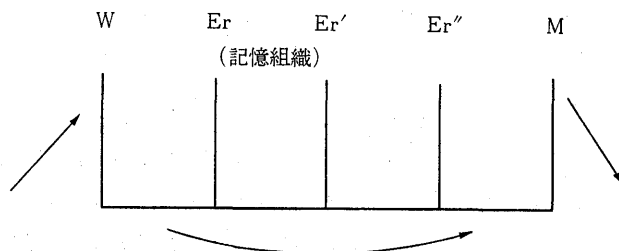
まず心的装置 psychischer Apparat という言葉だが、フロイトは心の働きの複雑性をはっきりさせるために、心をいくつかの部分（組織 System, 審級 Instanz などと呼ばれる）から成るものと考えた。その時フロイトの想定したモデルが顕微鏡やカメラのような光学機であったことは、注意しておいてよい。というのは、心的装置は基本的には反射装置と考えられていたからであ

る。ただし反射され伝達されていくのは光ではなく、刺激ないしそのもたらす興奮である。外界からの刺激を知覚すると何らかの運動が反射的に生ずるという反射過程こそが全ての心的作業の典型であるとフロイトは考えたので、有機体における刺激反応の原始的モデルを想定し、そこから話を始める。少し補足して言うならば、フロイトは、有機体には興奮量をより低く、あるいはむしろ一定レベルに保とうとする調節機能が備わっていると考えていた。この調節機能による興奮処理があらゆる心的過程の原型なのである。最も単純かつ原始的なモデルにおいては、興奮は直ちに運動へと放出される。それが次の図である。



(G. W. 542. Fig. 1)

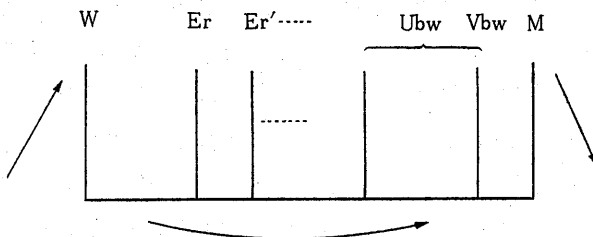
この原始モデルをもとに、フロイトは心的装置の複雑化すなわち発達を考えていく。その第1は知覚末端 Wahrnehmungsende において分化が生じることである。知覚を受取ることと知覚の痕跡（記憶痕跡）を保存することを同一の組織で行なうことは困難であるから、知覚組織から記憶組織 Erinnerungssystem が分化独立することになる。そして経験を積重ねるにつれて、記憶組織は層を増して豊かになっていく。この段階の心的装置は次のように図示される。



(G. W. 543. Fig. 2)

心的装置が発達する第2の局面は、Ubw と Bw-Vbw の2つの組織が区別されてくるということである。ここでちょっと補足しておく、第2の局面を迎える以前にも無意識は在り、意識も在った。第2の局面を迎えて前者から後者が生じたというよりは、むしろ両者の区別が生じたのである。第2の局面以降、無意識系の活動は抑圧によって意識系への進出を阻まれるようになる。抑圧という概念はもともと意識から遠ざける意味で用いられた。逆に言うと、抑圧されて意識から遠ざけられた心的内容が無意識的なのである。さしあたり意識的ではないが注意を加えれば意識されうる心的過程は前意識的と呼ばれ、そうした心的領域、前意識系は本質的にはむしろ意識系と区別ないものとされた。抑圧という概念は後に様々な問題をもたらすけれども、『夢判断』の時点では、「意識から遠ざける」という本来の意味で使われており、フロイトはこの抑圧機能を検閲 Zensur という言葉で表現しているのである。Ubw から Bw-Vbw へ進もうとする心的内容はすべて検閲を受け、それに合格するものだけが通過を許される。Ubw がそれ自身で自足というか完結していれば葛藤もないのだが、心的装置の原始モデルからわかるように、心的過程は興奮処理を求めて原則として知覚末端から運動末端へと経過するものなのである。無意識系の心的過程はそこにとどまることなく、意識を経て運動末端へと進行しようとする。「無意識とは抑圧されたものである」という言い方は、この時期の理論を集約した表現であるので、「抑圧」という語は確かにキーワードなのだが、無意識は抑圧によって作られるのではない点に注意しておきたい。むしろ意識化を制限する抑圧機能＝検閲があって、検閲を通過したものだけが意識的となり得ると言った方が誤解が少ないであろう。いずれにせよ、心的装置は第1組織 Ubw と第2組織 Bw-Vbw の2つに区別され、両者の間には屏風のように検閲が位置している。ここで検閲を行なうのは何者なのかということが問題となるが、フロイトの叙述は必ずしも一貫しない。Vbw がそれだと思わせる表現もするが、自我が暗示されたりもする。結局、検閲を行なうある心的力が存在し、それが Vbw の位置に存していると考えておけばまちがいはないと思う。この段階の心的装置は次頁のように図示される。

さて心的装置のあらましは以上で述べられた。かなり不十分な説明ではある



(G. W. 546. Fig. 3)

が、これを念頭に置いて夢形成のメカニズムを考えて行きたい。しかし後で考察すべき問題点を整理しておくことは無駄ではあるまい。実はそれが第5章の課題にも通じるのである。

それは、Ubw と Bw-Vbw の根本的区別はどこにあるのかという問題である。抑圧によって無意識が生まれるのでは決してない。逆に Ubw が Bw-Vbw と根本的に違っているから、Bw に至るためには検閲を受けねばならないのである。その違いとは何か。それがわかればなぜ抑圧という機能があるかもわかるだろう。欲望の解放ということが、なぜそれほど簡単なことではないのかもわかるだろう。このような問題を考えるためには第2局所論を研究しなければなるまい。しかし私は『夢判断』にとどまろう。今は心的装置理論のしたいのまとめをもとに、夢形成のメカニズムを考え、最後にやはり『夢判断』にとどまりつつ、第1組織の特徴、無意識的願望の正体について考えてみたい。

第2章 夢思想の形成

フロイトは「夢形成に当たっての心の作業は、2つの仕事に分かれる。夢思想形成と、その夢思想を夢内容へと変造することである」(G. W. 510)と言っている。そして夢思想は「完全に精確であって、我々の使用しうる一切の心的能力を以て形成される」(G. W. 510)と言う。つまり夢思想の形成は前意識的思考に属し、覚醒的思考とその質においてなんら劣らぬ作業なのである。それに反して夢思想を夢内容へと変造する作業の大部分は、「夢の世界に独得な」、「覚醒的思考とは質的に全く別のもの」(G. W. 511)と言われている。

る。従って2つの夢作業のうち後者が「本来の夢作業」と呼ばれているのであるが、メカニズムの順序に従って、まず夢思想の形成から話を進めることにする。

夢思想は先に述べたように、覚醒時と同等の正常な思考活動（前意識的思考活動）によって作られ、その内容は完全に辻褄が合ったもの、理論的整合性を備えたものである。しかしそれは単に脈絡のある思想内容というだけではなく、願望という形式を持っている。フロイトによれば、どんな夢にも意味があり、その意味とは願望充足なのである。ではその願望はどこから来るのか。それは第1組織、Ubw に由来するのである。従って夢思想形成には Vbw の思考活動と Ubw に由来する願望が関与している。しかし無意識的願望+前意識的思考活動=夢思想というような単純なものでは、もちろんない。

そのメカニズムをたどるために、まず夢を見させる「きっかけ」を取上げてみよう。フロイトは身体的刺激ではなく心的刺激こそが重要であると主張し、覚醒時思考のなごりとも言うべき日中残滓物に注目した。「どんな夢の中にも、前の日の諸体験への結びつきが見出される」（G. W. 170）と言われる通り、前日（ないし最近）の体験、印象、関心が夢を見るきっかけとなっている。さらによく考えてみると、前日の記憶のうち、重要なもの、大きな心的価値のある事件に関する記憶よりも、ことさら些細な、どうでもいい付随的事柄、とりたてて意味のない事柄に関する記憶が選ばれていることが多い。つまり夢内容を前に、どうしてこんな夢を見たんだろうと考えていくと、最近時の些細な印象が必ず見出されるのである。

しかしこうした日中残滓物は、あくまで「きっかけ」に過ぎない。夢思想に到達すべく分析を進めていくと、本当のきっかけとおぼしき、心的価値の高いできごとに行きあたる。ではそちらの体験から夢思想が作られるのであろうか。そうではない。重要さの程度にかかわらず、覚醒時の思考活動のなごりだけでは夢思想は作られない。もっと強力な何物かが必要なのである。その何物かとは、無意識的願望であるとフロイトは言う。日中残滓物は夢のきっかけ、刺激に過ぎない。あるいは単なる素材と言ってもいい。夢の原動力は、無意識的願望から来るのである。無意識的願望は意識へ侵入しようとしても、

抑圧に阻まれている。無意識的願望はそのままの形では夢に現われることさえ許されない。意識に入ることのできる（つまり前意識的な）思考なり表象なりと結びつくことによってのみ、表現の場を得るのである。また前意識的思考は、無意識的願望と結びつくことによって強化される。これがすなわち転移 *Übertragung* と呼ばれるメカニズムである。転移のメカニズムを要約するならば、「夢思想は、前意識的思考（日中残滓物）無意識的願望からエネルギーに転移されて成立する」ということになる。ではそれはどのように進行するのか。

心的装置は、覚醒状態から睡眠状態に入る時にどのように変化するのであろうか。眠ろうとする時我々は、外界から身を引き、様々な考え事やわずらい事を忘れようとする。要するに、我々の心を刺激したり揺り動かしたりするものをできるだけ減らして、心を静かな状態に置こうとする。フロイトはこうした変化を「覚醒時思考のエネルギー充当活動を一時的に停止させる」（G. W. 559）と言っている。しかしこの変化は常に完全に行なわれるわけではない。

「未解決の諸問題、心配事、諸印象の強い影響などは睡眠中にも思考活動を続けさせ、我々が前意識的と呼んでいる組織中に、その心的過程を続行させる」

（G. W. 559-560）のである。このような日中残滓物は *Vbw* においてその興奮過程を保持するが、睡眠中故に、意識化によって興奮過程を鎮めることはできない。また運動力はふつう睡眠中麻痺しているし、*Vbw* が睡眠中といえども見張っているので、運動力によって解消することもできない。今や *Vbw* 内に取り残され出口をふさがれた興奮過程は、どこかから強化されて心的装置内を逆行する以外にない。このどこかからが無意識的願望以外にないことは言うまでもなく、かくして *Vbw* 内の日中思想観念は無意識的願望と結びつくことになる。これを無意識的願望の側から言うと、それ自体では前意識内に入りこめなかったが、前意識的表象の背後に姿を隠すことによって、*Bw-Vbw* に作用を及ぼしうようになる。このように結びつく日中思想と無意識的願望の関係を、フロイトは企業家 *der Unternehmer* と金主 *der Kapitalist* になぞらえている。企業家の懐いているプランは、金主からの費用提供を受けてはじめて実行に移されるというわけである。

心的強度とか表象とかいう言葉が出たついでに少し補足しておく、フロイトはあらゆる心的産物に、その意味内容とその強度とを区別しているように思われる。たとえば「Aが欲しい」という欲望には、「BでもなくCでもなくAが欲しいのだ。Aとはこれこれのことである」という内容を示す側面と、「欲しい」という求める度合い、強度の側面とがある。悲しみのような情緒的な作用においても、「何が悲しいのか」という側面と悲しみの強度という側面がある。フロイトは内容的側面を示すのに表象という言葉を好んで使う。強度の方は、心的強度、心的エネルギー、情動、あるいはリビドーなどと言われる。転移というメカニズムにおいては、無意識的願望の心的強度が前意識的思考の表象に転移される。その際前意識的思考が本来持っていた強度は、できあがった夢思想に吸収合体されるからいいとして、無意識的願望が本来持っていたはずの表象の方はどうなるのであろう。この問題に関してフロイトは明確に言っていないが、前意識的表象の背後に隠れると考えていたらしい。しかし隠れるとはどういうことなのか。そもそも無意識的願望には固有の表象というものがあるのだろうか。フロイトは無意識的願望が性的である、幼児期に由来すると暗示しているが、どうもよくわからない。とりあえずこの難問は後に持越すことにして、以上で転移のメカニズムを終え、夢内容への変造に話を進めよう。

第3章 夢内容への変造

夢思想は前意識的思考の表象に無意識的願望から心的強度が転移されることによって作られた。転移によって無意識的願望（の表象）は身を隠すことができるのだが、それでも大手を振って $Bw-Vbw$ に入ることはできず、厳しい検閲を受けねばならない。夢内容への変造は、検閲通過を可能にするためになされる。しかしまた、この変造作業は夢独自の心的過程の特徴を示すものでもある。まとめて言えば、変造作業は「検閲」の目をくらませながら夢独自の仕方では願望を充足させるために行なわれる、ということになろうか。そこには圧縮、移動、表現可能性への顧慮、第2次加工という4つの手法が駆使される。以下これらを説明していこう。

圧縮 Verdictung

圧縮が行なわれていることは、語られた夢内容を分析して夢思想を探っていくと膨大な量になることから疑い得ない。ではその圧縮とはどのように行なわれるのであろうか。大きく分けて次の3つのやり方が認められる。第1は、代表要素の選択とでも呼ぶべきもので、夢思想の諸要素から一定の方式に従ってごく少数の要素を選ぶやり方である。夢思想に限らずおよそ思考の産物は、いくつかの観念群を含み、それらは互いに無関係なのではなく、ところどころ結びついた網目状になっている。つまり要素 x は観念群AとBに属す、要素 y は観念群A、C、Dに属すという具合である。圧縮の第1のやり方は、最も多くの観念群を代表しうる要素を選んでいく。従って選ばれた要素は多くの観念群の結び目に位置し、幾通りにも規定され、多面的、重層的な意味を持つことになる。第2のやり方は、「中間的共通物の作製」と呼ばれる。これは観念群Aに属する要素 a と観念群Bに属する要素 b を接近させて、 a と b の入り混じった ab という要素を作ってしまうことである。第3のやり方は、統一物の作製とでも呼ぼうか、「綜合人物」Sammelperson、「混合人物」Mischpersonのような「新たな統一的形象」die Bildung neuer Einheitenを作ってしまうことである。綜合人物とは、人物Aが、人物B、C、Dの特徴をも備えているもの、つまりAとして登場しながらB、C、Dを背後に含んでいるというものを指す。混合人物とは、複数の人物に共通する特徴が強調され、相異なる特徴が目立たなくされた人物像のことである。

移動 Verschiebung

移動とは、ある表象の心的強度が別の表象に移行する現象である。この移行は恣意的になされるのではなく、圧縮され多意的となった要素へと移行する。さらに言えば、検閲を通過しやすいように、多面的に規定されてはいるが、ことさら心的価値の低い要素が選ばれるのである。圧縮と移動は関連し合って働く。そもそも圧縮が可能なのは、選ばれた要素に強度が移動してくるからではないか。ここにも、表象と心的強度を区別する考え方があり、心的強度は表象から表象へと移ることができるという経済論的仮説が前提されている。

表現可能への顧慮 Rücksicht auf Darstellbarkeit

これはむしろヴィジュアル化と言った方がわかりやすいのではなからうか。夢は通常視覚的イメージであるから、夢思想を視覚的イメージに変える作業が行なわれねばならない。ではその作業はどのような進行するのか。まず夢思想から「視覚的表現を許すものが優先的に取上げられる。」(G. W. 349) 従って視覚化されにくい論理的関係などは大部分脱落する。しかし残された観念はなお多少とも抽象的な言語表現を持っている。そこで次に、抽象的な言語表現を、ヴィジュアル化しやすい具体的な言語表現に置き換えていく。これは言語表現レベルにおける移動と言ってよいであろう。ふつう移動とは、ある表象から別の表象へと心的強度が移動することであるが、この場合はある表象の言語表現レベルで、抽象的な表現から具体的な表現へと心的強度が移行する。ついでに言うと、夢思想が具体的な言語表現で語られるようになると、圧縮の作業もぐっと楽になる。「具体的な用語は……抽象的な用語よりも豊富に他のものとの関係を持ちうるから」(G. W. 345) である。とにかくこうして用意が整うと、最後に視覚的イメージに移される。ヴィジュアル化は3段階にわたって進行するのである。

第2次加工 sekundäre Bearbeitung

これもどうもわかりにくい言葉である。いっそ編集と言った方がびったりするのではないかと思う。映画を作る際まわしたフィルムを編集する、インタビューの録音テープを編集すると言われる際のあの編集である。というのもこれは、不合理で支離滅裂な夢内容に多少とも筋の通った関連性を与えようとする作業だからである。筋道を通すために、切れ切れの断片的要素をつなぐ部分を補ったり、材料を整理したりする。しかし第2次加工の作業はありきたりの編集に終始するのではなく、夢ならではの方法を備えている。それは既製の空想を利用することである。空想とか白日夢は我々がよく経験するありふれたものである。夢と同様無意識的願望の充足をめざしているのだが、あたかも現実であるかのように感じられることはない。我々は心のどこかでそれが単なる空想であることを知りつつ空想に耽るものなのだ。一方夢には、現実感をもって迫ってくるというようななまなましさがある。この特徴(幻覚性)については次

章で述べよう。話を戻すと第2次加工という作業は、夢思想と関係のある白日夢がすでに形成されている場合、好んでそれを利用する。この白日夢はしばしば非常に長い物語であるが、記憶の中に完成された形で保存されていたので、わずかなきっかけで全体が甦る。ほんの少しうとうとした間に、長い夢を見ることがあるのはそのせいである。第2次加工とはざっと以上のような働きであるが、第2次とは何を意味しているのであろう。圧縮、移動、ヴィジュアル化という3つの作業によって加工された内容に、あとから働きかけるから2次的と言うのであろうか。しかし夢作業においては時間的前後関係があるわけではない。夢思想の材料に選択的影響を及ぼすという仕方で、最初から第2次加工も参加しているのである。従って2次的という言葉はむしろ、他の3つの作業との本質的違いを意味しているように思われる。夢内容へ変造する作業は、大部分夢の世界独得の、覚醒時思考とは全く別物であるのだが、第2次加工だけはむしろ覚醒時の働きに近い。すなわち第2次加工を行なうのは部分的に目覚めた覚醒時思考なのだと言えよう。

第4章 願望充足の仕方—退行

夢は夢であって現実ではない。それなのにあたかも現実であるかのような実感を伴って体験される。この特徴は幻覚的とも言えよう。夢形成において、無意識的願望は幻覚的に充足されるのである。ではこの幻覚的という特徴はどのようにしてもたらされるのであろうか。フロイトは「退行」Regression という概念によって説明している。

心的装置の基本モデルを考えた際にも触れたが、心的過程は原則として知覚末端から運動末端へと経過して興奮を処理する。記憶組織が多重化することと、抑圧によって U_{bw} と $Bw-V_{bw}$ が区別されることによって心的装置が発達（複雑化）すると、部分的には興奮過程の停滞、逆行が認められるようになるが、心的装置全体でみるとやはり、この原則に従っている。具体的に通常の覚醒時における心的過程を考えてみよう。思考活動の際、記憶痕跡の要素が注意力の配分を受けて意識面に浮かびあがるが、これは記憶組織への逆行と言えなくもない。また抑圧という働きは U_{bw} 内の興奮過程が Bw に侵入す

ることを抑える働きなのであるから、Ubw 内に興奮過程が停滞している。しかし覚醒時においては、思い出された記憶要素が本物の知覚であるかのように、なまなましい実感を伴って感じられることはない。つまりこの逆行は「知覚形象を幻覚的に作り出すことはできない」es vermag die halluzinatorische Belebung der Wahrnehmungsbilder nicht zu erzeugen (G. W. 548) のである。

では夢において(すなわち睡眠時において)なぜ幻覚 Halluzination が出現するのか。それは「興奮が逆行的な途を採り、心の運動末端の方へ向かって移動していくかわりに、知覚末端の方へ向かって移動していく」(G. W. 547)からである。覚醒時における心的過程の動き方は「前進的」progredient であるのに対して、夢において幻覚を出現させる心的過程のそれは「退行的」regredient と言われる。退行 Regression とは、「夢の中で表現(観念)が、それがかつてそこから出てきたところの感性的形象へ逆戻りしていくこと」

(G. W. 548)なのである。記憶痕跡にある要素を思い出す際の逆行が記憶組織までであるのに対して、幻覚を生む「退行」は知覚組織にまで逆行する。しかしなぜそれは睡眠中にのみ可能なのであろう。また、どのような観念でも一様に退行するのであろうか。

まず睡眠中に退行が可能なのは、「個々の組織のエネルギー充当状態 Energiebesetzungen が変化する」(G. W. 549)ことによると考えられる。すなわち日中は知覚末端から運動末端へと絶えず流れる潮流があるのに対して、夜間眠っている時には、この潮流が停止して興奮の逆行を妨げなくなる。眠ろうとすることは、覚醒時思考のエネルギー充当活動を一時的に停止することである。この停止ないしは Bw-Vbw の充当を空にしようとする傾向の故に、検閲が多少緩むが、全く無力化するわけではない。また前意識は睡眠中といえども運動力支配を止めていない。ここに逆行を許す条件が整えられる。

しかしヒステリーやパラノイアにおける幻覚、正常人にも稀に現われる幻影など、覚醒時にも幻覚が生じることがある。この場合、覚醒時の潮流があるにもかかわらず退行現象が起きているのだから、退行が起こるためには、エネルギー充当状態の変化とは別の(そして恐らくより強力な)要因が必要なのだと

思われる。そこで第2に、退行する観念が問題となってくるのだが、結論から言うと、どのような観念でも一様に退行しうるのではなく、「抑圧された記憶、ないしは無意識のままでとどまっている記憶と密接な関連にある思想や観念」(G. W. 549) が主として退行するのである。

抑圧され、無意識のままでとどまっている記憶は、また多くの場合、幼児期に由来するものであり、実際に体験されたことであれば単なる空想であれ、ことさら視覚的な場面として記憶の奥底に沈澱している。それは無意識の核のようなものとも言えるかもしれない。

退行は、ある観念が、この抑圧された無意識の幼児期記憶と関連性を持つ故に抑圧され意識から遠ざけられるという契機と、この無意識的幼児的記憶から牽引されるという契機から起こる。つまり抑圧による意識からの差し戻しと、無意識的記憶への牽引という2つの力が働いているのである。

要約すると、退行現象には次の要因が働いている。

- 1) 夜間は心的装置内のエネルギー充当状態が変化する。知覚末端から運動末端への潮流が停止し逆行を妨げなくなる。
- 2) 抑圧され無意識の幼児的記憶と関連する観念が、抑圧によって意識から差し戻され、視覚的に強烈なその記憶に引寄せられる。

第5章 願 望 と は

以上で夢形成のメカニズムは明らかになった。次に、夢を見させる原動力であるところの無意識的願望について考えてみたい。そのために心的装置の発達をもう一度取上げてみよう。

まず、原始的な心的装置は反射装置であったと想像される。興奮の堆積を避け、できるだけ無興奮の状態(あるいは一定レベルの興奮)に自分を保とうとする、いわゆる恒常原則 Konstanzprinzip によって支配され統御されており、外部から心に達する感覚的興奮を直ちに運動力を通じて放出する。

しかしこのような簡単な機能では対処できない事態が必然的に起こってくる。それは食欲に代表される肉体的生理的欲求である。この興奮(空腹の刺激)を解消するために、まず運動力の中に捌け口を求める(空腹の子供が泣い

たり手足をばたばたさせたりするのがそれである）が、事態は改善されず依然として興奮は消えずそこどころかますます高まっていく。

結局なんらかの外部からの働きかけ（小児の場合なら乳を与えられること）によってのみ、内的刺激を解消する満足体験が経験される。この「満足体験」Befriedigungserlebnis の本質的要素は、ある種の知覚の出現ということである。以後この知覚の記憶像は、欲求興奮の記憶痕跡と連想的に結びつく。

そこで、再びこの欲求が起こってくると、直ちにかの知覚の記憶像を再生させようとする心的作業が始まる。すなわち知覚そのものを再び喚起させ、初めの満足体験を再現させようとするのである。

願望とは一般に、不快（興奮の堆積）から出発し快（興奮の減少、恒常レベルの回復）をめざす心的装置内の潮流のこと、とされている。最初の願望は、満足記憶を再生させる幻覚的エネルギー充当であった。知覚の再出現が願望充足なのである。この最初の願望形態は「知覚同一性」Wahrnehmungsidentität をめざしていると言われる。これは先に説明した「退行」のメカニズムにほかならない。

しかしこの知覚同一性の作成は、本当の満足を与えない。満足が得られるのは外部からのなんらかの現実的な対象によって、同一知覚が与えられた時だけなのである。小児の例で言えば、乳（ないしは乳房）という対象によって、乳を飲んだ時の知覚が与えられねば満足は得られない。幻覚的な知覚同一性追求に固執しては、心的装置はその力を無駄に使い果たしてしまうことになる。今や知覚の再生にまで至る完全な退行を停止させ、心的力を別の方向に転換させねばならない。すなわち、満足を与えてくれる対象の現実的知覚を探し、それが現われるよう外界を変化させるような複雑な思考活動を行なわねばならない。この退行の阻止と、現実的の同一知覚の獲得を可能にする複雑な思考活動こそが、第2組織（Vbw）の使命なのである。先の知覚同一性の追求は、願望充足への最短の道であったが、第2組織の為しうる思考活動は、いわば迂路、廻り道である。

以上で第2組織がなぜ必要となってくるかが述べられた。今、発達の観点から私は第2組織が途中から出現するように述べたが、本論文第1章でも触れた

ように、はじめに意識が存在しなかったわけではない。発達第2の局面を迎える前には、意識と無意識の区別がなく、現実と幻覚の区別が不十分だったのではなからうか。そのような状態では生きていけないために、心的エネルギーの使い分けが必要となり、第1、第2組織が区別されるようになる。そして第2組織は少しずつその技術を高度なものにしていくのである。一方第1組織のやり方（退行による知覚同一性の作成）は、今や役に立たず無駄だとわかって、棄てられたやり方なのであるが、にもかかわらず、たとえば夢において維持されている。「夢を見る」ということは、今や克服されてしまった子供の心の営みの一部なのである。それどころかむしろ、第2組織のやり方で解消される願望の方が、ごく一部にすぎないとも言える。第2組織の近づき得ない願望は、結局第1組織のやり方にゆだねられる。

次に第1組織と第2組織の違いについて、もう少し見てみよう。「第1組織の活動は興奮量の自由な流出 *Abströmen* をめざしている」(G. W. 605)と言われる通り、心的エネルギーはある表象から別の表象へ自由に移行し(自由エネルギー *freie Energie*) 満足体験の残した知覚を幻覚的に再生することをめざす。このような心的過程は第1次過程 *Primärvorgang* と呼ばれる。

一方第2組織は、まずエネルギーが自由に流れ出て知覚組織にまで退行することを阻止する。次に現実吟味の思考活動を行ない、その間充足は、本当に満足を与えてくれる対象が得られるまで延期される。吟味が終わった時すなわち外界からやってくる対象が記憶にある知覚と同一の知覚を与えてくれそうだと判断した時はじめて、興奮の放出を許すのである。結局は興奮放出つまり願望充足をめざしているのだが、第1組織が知覚同一性を作り出す最短距離を行くのに対して、第2組織は思考同一性 *Denkidentität* (現実吟味による同一知覚であるという判断) を獲得しようとする。また単に外界から偶然やってくる対象を吟味するだけでなく、より積極的に、望む知覚が得られるように外界に働きかける活動も、第2組織だけが為しうるところである。この外界変革を為すためには、大量の記憶材料を自由に駆使できなければならないが、記憶要素を充当するのにエネルギーを全て使ってしまうては、外界変革に必要なエネルギーが不足してしまう。従って第2組織は、充当エネルギーの大部分を拘束して

おき、わずかな部分だけを記憶表象から記憶表象へ模索的に移動するために使用するであろう。第2組織の行なうこのような過程は、第2次過程 *Sekundärvorgang* と呼ばれる。エネルギーは拘束され（拘束エネルギー *gebundene Energie*）思考活動という廻り道を通して、安定した形で放出へと導かれる。

第2次過程は第1次過程の修正であるとも言える。第1次、第2次という命名は、第2次がより高次の機能であることを示しているだけでなく、時間的（発生の順を示す）意味も含まれていることは言うまでもない。「第2次過程が人間生活の歴史上で漸次形成されていったのに反して、第1次過程は人間の心の内に、そもそもの最初から与えられていた」（G. W. 609）のである。

以上、心的装置の発達及び第1組織と第2組織の違いについて考えてきたが、最後に、夢を見させる原動力であるところの無意識的願望について、わかったことをまとめておこう。

- ・それは第1組織に属する。
- ・その求めるところは知覚同一性（退行による幻覚形成）である。
- ・自由エネルギーを持つ。すなわち表象から表象へと自由に移動しうる。またまわり道をしないで直ちに満足に到達しようとする。
- ・第2組織はこれをコントロールしようとする。コントロールが成功するとエネルギーは拘束され、まわり道を通して現実的満足へ向かうように修正される。しかしコントロールが及ばぬものの方がむしろ多い。

ざっとこんなところが、無意識的願望の特徴である。驚くほど後に提唱されるエスの特徴に似通っている。この時点ですでに第2局所論の萌芽が認められるのである。

終 章

本論文で私は、夢形成のメカニズムを考察し、最終的には無意識的願望に到達しようと試みたのであるが、無意識的願望というものは、考えれば考えるほど難問である。我々の欲望、願望はそれが意識化され得るものであれば、吟味することもできるし、統御することもできる。しかし無意識的願望が相手となると、まさに我々の自我にとって手の届かないものであるからこそ無意識なのであり、我々にはどうすることもできないままその力に翻弄されるわけである

から、やっかいきわまりない。しかし無意識的願望を知る術が全くないわけではない。というのもそれは抑圧に阻まれつつもゆがんだ形で絶えず立ち戻ってくる（たとえば夢）ので、そこに精神分析の威力が発揮されるのである。

そこで次のことが問題となる。第1に精神分析の技術水準が上がれば、無意識的願望をすっかり知ることができるのであろうか。第2に、抑圧さえなくなれば無意識的願望は文字通り解放され、よくわかるようになり、いわば無害となるのか。

第2の問題から考えると、性的なタブーが取り払われることによって無意識的願望が解放されると信じている人もあるが、どうであらうか。私はそうは思わない。前にも言ったが、抑圧されたから無意識が生じたのではない。抑圧は無意識的願望の膨張を調節する弁のようなものである。抑圧が必要となる真の理由は、第2組織の使命と同じである。抑圧の本質は社会的タブーにあるのではない。

次に第1の問題であるが、いかに精神分析の技術が高度になろうと、無意識的願望の正体を知ることが不可能に近いほど困難ではないかと思われる。表象から表象へと自由に移動しうる無意識的願望の、本来の固有の表象を見つけることはできるのであろうか。精神分析は、エディプス・コンプレクスとか破壊衝動とかを持ち出すが、これらは結局フィクションではないかと批判される。たしかに異なった文化圏では通用しにくいという限界があり、この種の学説は普遍性に欠けるのである。しかし問題の焦点が人間関係にあることはたしかだろう。無意識的願望がどのように発現していくかを問う意味で、乳幼児研究が興味深く思われる。

また、固有の表象を持たない（らしい）無意識的願望の世界を考察するのに、あくまでも欲望という概念にこだわるのはどうかとも思う。欲望という形に集約される前のレベルで考える必要があるのではなからうか。私は情緒のレベルを考えているのである。心の働きを表象と心的強度の2面から考えることにはひっきりかき覚える。実際の我々の心はもっと多彩なものではなからうか。ということを今後の課題としつつ、本論文を終えることにする。

（たむら きみえ 博士後期課程二回生）